

BVD-MD Q&A

2008年4月13日

Q. 乳牛の市場等で、牛ウイルス性下痢、粘膜病（BVD-MD）のワクチン接種が必要になるといわれています。「BVD-MD」とは、どんな病気ですか？

A. 「BVD-MD」とは、牛ウイルス性下痢ウイルス（BVDV）の感染により発生する届出伝染病のことを言います。

病名には、「下痢」とつくのですが、実際は、子牛から成牛まで年齢には関係なく発熱・下痢・呼吸器症状など、さまざまな症状を引き起こします。



妊娠牛は特に注意

最も注意したいのは、「妊娠牛が感染した場合」です。

胎盤を通じて胎仔に感染し、流産や子牛が奇形になる。

生まれた子牛がウイルスを排出し続ける持続感染牛（PI牛）になる。

この2つの可能性があります。

予防が重要だ！

P I 牛の多くは、外見上の異常がない、あるいは若干の発育不良を示す程度で、臨床的に発見することは、なかなか困難です。

P I 牛の体内では、常にウイルスが増殖し続け、糞便や尿・乳汁・唾液・鼻汁中に多量のウイルスが排泄され、強力な感染源となります。知らず知らずのうちに、牛群にウイルスが蔓延してしまうため、「BVD-MD」の発生の多くは、子牛の肺炎や発育不良、または流産の多発で明らかとなるケースがほとんどで、経済的損失が大きいいため、予防が重要となります。

どうすればいいの？

この病気の対策は、感染源である P I 牛の早期摘発・淘汰が基本となります。

なお、牛群中の P I 牛を調べる方法がいくつかありますので、獣医師にご相談ください。

導入牛は、健康状態をよく確認し、健康を確認してから牛群に混ぜましょう。

ワクチンで防ごう

この病気は、ワクチン接種で予防が可能です。

ワクチンには、生ワクチンと不活化ワクチンがあります。

生ワクチンは一回接種で効果がありますが、妊娠牛には使えません。不活化ワクチンは妊娠牛にも使えますが、一回接種しただけでは効果が不十分です。また、ワクチンは接種してから効果が出るまで時間がかかるので、移動の直前に接種するのは止めましょう。

普段から牛の健康観察を心がけ、子牛の発育不良、持続する下痢、流産の多発が認められた場合、直ちに獣医師に連絡してください。

胎子の感染時期と症状

1.胎齢100日以前

流産（ミイラ胎仔など）

持続感染牛（P I 牛）

2.胎齢100～150日

先天異常

（水頭症、小脳形成不全、盲目、運動障害等）

3.胎齡150日以降

健康仔牛として出生